

琉球大学学術リポジトリ

TO OKINAWA AND BACK AGAIN : ハワイの沖縄系帰米二世のライフストーリー

| | |
|-------|---|
| メタデータ | 言語: Japanese 出版者: 琉球大学移民研究センター 公開日: 2018-11-13 キーワード (Ja): 沖縄系帰米二世, ライフストーリー, アイデンティティ, エスニシティ キーワード (En): Okinawan Kibei Nisei, Life Stories, Identity, Ethnicity 作成者: 前原, 絹子, Maehara, Kinuko メールアドレス: 所属: |
| URL | https://doi.org/10.24564/0002010167 |

TO OKINAWA AND BACK AGAIN : ハワイの沖縄系帰米二世のライフストーリー

前 原 絹 子

- I. はじめに
- II. 本研究の目的と手法
- III. 調査結果：沖縄系帰米二世のライフストーリー
 - 1. 沖縄の思い出
 - 2. ハワイに戻って
- IV. ウルマ青年会
- V. おわりに

キーワード：沖縄系帰米二世，ライフストーリー，アイデンティティ，エスニシティ

ウルマのウルは砂といふ意，マは島を意味する。…ウルマは「砂島」といふ意味である…砂は御承知の通りバラバラで何の変哲もない。下世話にも，何の味もしないことを「砂を噛むやうだ」といふではないか。ところがこの砂にセメントを混ぜて水でこね合わすと大変固い石と成ることが出来る。希くはウルマ青年会員諸君が戮力協心しあって一丸となり，コンクリートの如く空々社会という一大建築物の必要不可欠な素材たらんことを期せられたい¹⁾。

— 『ウルマ青年会 会誌 第一号』からの抜粋 —

I. はじめに

ハワイにおける日系移民のうち，沖縄系移民は現在ハワイ総人口の約4%，日系人口の約22%を占めるのだが²⁾，彼らは自らを「オキナワン」または「ウチナーンチュ」と呼び，独特の文化や社会を形成している³⁾。本稿では，これまで，沖縄系移民研究でほとんど取り上げられることがなかったハワイの「沖縄系帰米二世」に注目する。「帰米二世」とは，文字通り，「帰米した」，アメリカに帰ってきた二世のことを指す。米国で生れたが，幼少年期を日本で育ち，日本で教育を受け，戦前もしくは戦後，再び米国へ帰ってきた二世のことを言う。本研究では，沖縄とハワイのふたつの場所を生きた沖縄系帰米二世のライフストーリーに焦点をあて，現在，高齢になった彼らが自己の人生をどう捉え，物語るのか明らかにする。

戦前，特に1920年から30年後半にかけ，アメリカ本土そしてハワイの日系コミュニティにおいて，米国生まれの二世を日本留学という教育上の理由や子どもの口減らしを目的とした経済的な理由で日本へ送り出すことは珍しいことではなかった。1935年，山下草園が『日系市民の日本留学事情』という著書の中で，ハワイの一世がわが子を日本へ送りだす社会的背景を詳しく述べている⁴⁾。戦前，米国本土のみならずハワイにおいても，日系人の多くには，アメリカの社会にうまく適応するために，日本らしさをすて，アメリカの文化に同化するよう努力する

べきだという考えがあった。しかしその中で、一部の一世は、子どもには日本文化や日本人としてのアイデンティティを継承させたいという期待をもっていた。そこで、ある程度、経済的にゆとりのある親は、米国生まれの二世を「日本留学」という目的で短期間日本に送り出した。送り出された彼らの多くは、十代後半で、11年の準備教育の後に、東京、京都、大阪等大都市の専門学校や大学に送り出された。二世の日本留学は流行となり、特に、1938年、1939年、頂点に達する。その背景には、1931年の満州事変で圧勝した日本帝国に対する忠誠心の芽生えが一世そして二世の間にあった、と山下（1935）は考察している⁵⁾。男性のみならず、女性の日本留学も奨励された。特に家庭の基盤となる女子が日本留学によって日本文化を身につけることは日本文化の継承を可能にする意義があった。多くの女子が、日本楽曲や日本舞踊、編み物、お花などを学ぶために留学したのである。留学生の大部分は学業終了後、帰米するのであるが、早稲田などの名門大学へ日本留学した男性はハワイ大学卒より条件のいい職業にありつけたという。また日本留学の経験をした女性は結婚候補者として好まれた⁶⁾。

一方で、経済的に困難な生活を強いられている一世たちは、子どもを経済的な理由で日本の故郷へ送ることもあった。故郷への仕送りをしなければならないとか、子どもの数が増え、仕事の足手まといになるといった理由から、幼い子どもを祖父母や親戚のもとへ送り出し、彼らに養育を依頼するといった事例が少なくなかった。中には生後1歳にも満たないわが子を母国へ送り出すこともあった。そして、日本へ送られた子どもたちは、日本語を主言語として使用し、また米国の文化・習慣よりも、日本の文化・習慣を身につけて成長していったのである。山下（1935）は、日本留学した日系市民と、幼少年期に帰った日系市民との間には「自然の牆壁（しょうへき）」⁷⁾があると指摘し、幼少年期に帰った日系市民について以下のように述べている⁸⁾。

幼少年時日本に歸つて來た日系市民は、大抵小學校の適度の學年に編入されて、純然たる日本式教育を受けるので、長ずれば日本に生まれた日本国民と、殆んど變りなき人になる。歸朝當初の彼等は英語も初歩の程度であつて、本格的な物がいり込んではゐないし、アメリカの風習も脱け切らない程に染みこんではゐない。また彼等の思考力や、觀察力や、判斷力なども固定してゐないから、二、三年の日本生活をすれば、何から何まで、殆んど純日本式になつて來るのである。ただ日本に生まれた者と違ふところは、自分がアメリカに生まれたと言う事實と、其の出生地の風物人情に関する單純な記憶が頭の底にあることであり、更にその記憶に依つてアメリカと言ふものに關する限り、日本に生まれた者に比較すれば、愛着と理解力が強いと言ふだけのことである。

そして、彼らは、やがて幼少年期を過ぎた日本を離れるのであるが、どのような事情で帰米したのであろうか。先行研究によると、戦前に帰米した多くの男性は、日本の徴兵を免れることを目的として米国に帰ってきたという見方がある⁹⁾。当時の日本（沖縄でももちろん）徴兵制度が施行されていた。男子は満二十歳になると、徴兵検査を受け、合格すれば兵役に服する義務があった。また、1930年代に入ると、日本は中国に「満州国」を建国し、大規模な移住計画を推し進めた。その一環として編成されることになったのが満蒙開拓青少年義勇軍で、全

国で募集が開始された。アメリカと日本の二重国籍を保持する二世には日本軍として徴兵される可能性があった。一方、1930年代、米国本土においては、アメリカの国籍法改正に対する危惧から、二重国籍をもつ在日二世に対して米国籍を確保するためにも徴兵を回避しアメリカにもどってくることを促す「帰米奨励運動」も行われた¹⁰⁾。そのような状況の中で、徴兵によって「どうせ父母のふるさとを離れなければならないのなら、自分の『生みの国』であり、姉と兄の暮らしているハワイへ渡りたかった」という理由もあった¹¹⁾。残念ながらハワイにおいての帰米二世に関する統計はないが、カリフォルニアにおいては1930年までに二世の13パーセントが日本である程度の教育を受けていたという¹²⁾。

沖縄系移民の場合、特に1900年代から1910年代にかけて、農業移民としてハワイに出稼ぎに来た沖縄系移民の一世たちは、他府県移民者と比べ経済的に困難な生活を強いられており、不本位ながらも、ハワイで生まれた子ども達を幼年期から青年期にかけ、故郷へ送り出すことが少なくなかった。子どもの数が増え、米国では育てることができない、仕事の足手まといになるといった理由から、母国の祖父母や親戚にわが子の養育を依頼したのであった。親たちは、いずれ、相応の貯蓄ができた時には帰郷したいという希望があった。故郷沖縄に送られた二世は小学・中学卒業まで、沖縄方言を主言語として、また学校では主言語として標準語（当時、沖縄方言は学校教育で禁止されていた）を学んでいった。戦前、沖縄にはこうしたハワイ生まれの青少年が約3千人もいて、彼らは1930年代に入ると船便毎に20から30人も再びハワイに戻ってくるようになった¹³⁾。そして、彼らは「帰米二世」と呼ばれ、ハワイ育ちの二世とは別のカテゴリーとして扱われるようになった。

II. 本研究の目的と手法

これまでの日系移民史において、帰米二世についての記述は数少ない。その上、日本留学という教育上の理由で日本に送られた二世に注目されたものがほとんどであり、親の経済水準の違いや出身地（日本本土・沖縄）の違いによる帰米二世の特徴についてはほとんど関心が払われてこなかった。また先行研究は、異なる国で育った帰米二世の社会的適応における困難さを強調したものがほとんどであり、「日本と米国の狭間で」経験した帰米二世の心理的葛藤に関心を払ってきた¹⁴⁾。確かに、彼らは第二次世界大戦時に特異の経験をした。日本の軍国主義教育を受けたということから、アメリカで生まれ育った二世に比べて日本人意識が強く、戦争中は日本のスパイと疑われることもあり、強制収容所へ送られた者も多かったと指摘されている。一方で、日本語に堪能な帰米二世が米国陸軍情報部において通訳兵として任務を果たす場合もあった。近年、金城（2004）は沖縄系帰米二世の言語文化に注目し、彼らがいかに沖縄コミュニティにおいて、文化形成の担い手となったのかという興味深い研究を行っている。彼によれば、沖縄系帰米二世の場合、日米両語のみならず沖縄方言にも堪能であったため、米軍通訳兵として沖縄戦で極めて重要な役割を果たした¹⁵⁾。

しかしながら、これまでの先行研究においては、近代国民国家が作りだした社会構造の中で、帰米二世が政治的・経済的・歴史的に「ふりまわされ」てきたことに研究の視点がおかれてきた。本研究では、むしろ、帰米二世を、社会における行為の主体者として描くことの可能性を探りたい。沖縄と日本とハワイとアメリカという物理的・社会的境界の中間的位置を担い

ながら、彼らはいかに主体的に創造的に生きてきたのかについて、彼ら自身のライフストーリーを通して明らかにしたい。

ライフストーリーとは、一般的に、個人が歩んできた自分の人生について語るストーリーで、ライフストーリー研究とは、「個人が人生経験について物語る行為と、語られた物語についての研究」¹⁶⁾をさす。特に、歴史として残りにくいマイノリティやマージナルな集団に属するさまざまな人々を対象として、その個々人のライフストーリーから社会の構造を解明していく。つまり、石原(2002)のいうところの「社会の暗部や周辺部から社会全体を逆照射していく」¹⁷⁾可能性を我々に与えてくれる手法であると考えられる。

幼少年期に故郷へ送られた沖縄系帰米二世は、帰米後、英語がうまく話せないこと、生活習慣や、思想などの違いから、ハワイで育った家族との葛藤を経験したり、職業選択に不利益をこうむったりした。また当時、ハワイの沖縄系移民は言語・文化の違いにより他府県人から差別されていた。沖縄系帰米二世は沖縄から来た「新移民」であるということで、少なくとも社会において二重の周辺性をもつ複合的マイノリティであることで、自己を単なる「沖縄系の二世」、また「日系帰米二世」としてひとくくりにできないという認識をももたらしめている。確かに、彼らがマージナルな存在として体験した困難は無視すべきではない。しかし、ライフストーリー・アプローチを用いることにより、現在の沖縄系帰米二世の語りに織り込まれた過去の経験の意味づけ、すなわち自己再定義のプロセスを考察することができよう¹⁸⁾。浅野智彦(2001)が「自己は自己物語を通して産み出される」¹⁹⁾と述べているとおり、自己を語るとき人は自分自身の人生の特定のエピソードを選び出し(他のものを捨て)、それをある筋に沿って紡ぎ合わせていく。彼らが自己の人生を物語るプロセスの中で、自主的にまた客観的に自己の体験に価値を見出し他者に物語る行為は、以前に単にマージナルな存在として描かれていたグループのもつポジティブ・マージナリティ²⁰⁾の側面を描くことを可能にするであろう。また、彼らのライフストーリーを研究することによって、ハワイの沖縄コミュニティの歴史や社会構造やまた内在する諸問題を浮き彫りにし、またそのコミュニティの社会的・歴史的展開を描き出すことができよう。

筆者は2004年2月から2005年5月までの約1年半、ハワイの沖縄コミュニティの行事、集会などに参加し、沖縄系帰米二世たちの活動への参与観察を重ねてきた。毎週金曜日朝10時から午後5時半まで、オアフ島西部ワイパフにあるハワイ沖縄センターの図書館の資料整理の手伝いをする機会に恵まれ、その合間、同じくボランティアをしている沖縄系の方々と出会う機会を得た。彼らから沖縄系帰米二世を紹介してもらおうというスノーボール・サンプリング方法を取り、合計18人の沖縄系帰米二世の生の声を集積することができた。本稿では、特に経済的理由で幼少期に沖縄に送られたと述べた14人(女性2人、男性12人)に焦点をあてる。表1に示してあるように、調査時の年齢は69歳から92歳で、沖縄には生後5ヶ月から10歳の間に送られ、沖縄で7年間、長くて18年も滞在する。また彼らは、徴兵制度を逃れるため、またよりよい生活を得るために、1928年から1947年の間にハワイに帰国する。帰ってきた年齢は12歳から22歳であった。

インタビューはさまざまな場所で行われた。たとえば、ハワイ沖縄センターでボランティアの方々と昼飯を共にしながら、また雑談している傍らそれらしく彼らの人生経験について聞く

こともあったし、また彼らの家で1時間半ほど個人的にインタビューを行うこともあった。その時々様子をメモに残したり、語りをテープに録音した。インタビューでは特に、帰米経験がどのような困難をもたらしたのか、そうした困難にどう対処してきたのかなど、あらかじめ質問事項を準備したが、できるだけ各人が語りたいことを重視し、英語、日本語、沖縄方言を混ぜ、自由に語ってもらった。プライバシーに配慮して、本稿では個人名が特定できないようにした。14人という少数データでは代表性に乏しいが、筆者はライフストーリーから、彼らが過去の経験を現在の彼らがどう意味づけ、調査者である私にどう語るのかに注目し、彼らの経験を丁寧に記述していった。本論のテキストは、「聞き手」である調査者の筆者に語られたものであり、つまり「語る者と語られる者との共同の産物」²¹⁾であるという点をあらかじめ明確にしておきたい。

また本研究では、1933年に沖縄系帰米二世によって設立された「ウルマ青年会」の会誌も参考にした。その会誌には、沖縄系帰米二世が帰米した当時の感情や認識が記述されている。帰米当時の自己呈示と、人生を重ねた今語られる自己体験の記憶の提示に違いがあるのか考察しながら研究を進める。

表1 インタビューした沖縄系帰米二世のリスト

| 氏名 | 性別 | 生 年 | 沖縄へ送られた年(年齢) | 沖縄での滞在期間 | ハワイに戻ってきた年(年齢) |
|----|----|-------|--------------|----------|----------------|
| I | 男性 | 1912年 | 1914年 (2歳) | 15年 | 1929年 (17歳) |
| A | 男性 | 1914年 | 1916年 (2歳) | 18年 | 1934年 (20歳) |
| H | 男性 | 1914年 | 1924年 (10歳) | 15年 | 1934年 (20歳) |
| K | 男性 | 1915年 | 1921年 (6歳) | 10年 | 1931年 (16歳) |
| Y | 女性 | 1915年 | 1921年 (6歳) | 7年 | 1928年 (13歳) |
| U | 男性 | 1915年 | 1920年 (5歳) | 11年 | 1931年 (16歳) |
| E | 男性 | 1918年 | 1923年 (5歳) | 9年 | 1932年 (14歳) |
| D | 男性 | 1918年 | 1923年 (6歳) | 10年 | 1934年 (16歳) |
| N | 女性 | 1919年 | 1921年 (2歳) | 15年 | 1936年 (17歳) |
| G | 男性 | 1921年 | 1921年 (5ヶ月) | 16年 | 1937年 (16歳) |
| T | 男性 | 1922年 | 1924年 (2歳) | 14年 | 1939年 (16歳) |
| S | 男性 | 1923年 | 1927年 (2歳) | 14年 | 1939年 (16歳) |
| R | 男性 | 1925年 | 1935年 (10歳) | 12年 | 1947年 (22歳) |
| O | 男性 | 1935年 | 1935年 (6ヶ月) | 12年 | 1947年 (12歳) |

III. 調査結果：沖縄系帰米二世のライフストーリー

14人の沖縄系帰米二世のライフストーリーは多様であった。沖縄系帰米二世の語りのなかには、自己のアイデンティティの提示として「帰米二世」として、また「ウチナーンチュ」としての体験を選びながら、過去の経験を現在の自己と照らし合わせ意味づけ、語りに織り込む行為がみられた。また彼らの語りからは、彼らの生活やコミュニティでの社会的地位がそのコミュニティの歴史と社会の展開に絶えず影響・変動していることがわかった。

1. 沖縄の思い出

沖縄系帰米二世が沖縄に帰った理由を話す際、彼らはそれが彼ら自身で望んだものではなかったことを指摘する。「母が病気になってここ（ハワイ）で働けないから私をつれて沖縄に帰っ

た（M氏）」、「沖縄にはただ親戚に顔合わせに帰ったのに、ハワイに戻ることができなくなった（T氏）」などハワイ生まれの二世が沖縄で幼年期を過ごす理由はさまざまであったが、幼年期の子にとって、家族の別離は耐え難いものがあったとその当時を思い出す。Yさんは小学校に入学するのを楽しみにしていたが、母が病気になり、父とまだ幼いきょうだい3人をつれて沖縄に帰った。長女であるYさんは母親の代わりとしてきょうだいの世話をしなければならなかった、とその当時を「一番苦勞した日々（Yさん）」と意味づけた。

また、沖縄系帰米二世の語りのなかには、沖縄での生活が悲惨なものであったことが強調される。沖縄にいる親戚に預けられたもののハワイにいる両親から一切の仕送りもなく、経済的な苦勞を被っている親戚の家で虐待にあった経験、沖縄に来たものの、引き取ってくれる者がいなくて親戚の家を歩きまわってお願いしていた母の姿、また芋と味噌汁だけの食事。また、沖縄の親戚の家に世話してもらったものの本家の子どもたちと比べてひどくこき使われ、預けられた家において疎外感を抱いたという。

一方で、沖縄では「ハワイ帰り」という言葉で知られているように、当時、ハワイに移民した家族は、沖縄においては経済的な面では利益をこうむっていた。なかには、ハワイの両親からの援助で、地元の人たちに比べて経済的な面では利益をこうむっていた者もいた。首里や那覇の中等学校に進学する者もいた。

興味深いことに、「ハワイ生まれ」の彼らは学校や地域において別の沖縄の子どもと接する中で他の子とは違う扱いをされ、しかもその扱いに立ち向かっていった経験を実に楽しそうに話した。例えば、ハワイで10年すごして沖縄に送られたR氏は、沖縄で他の子どもたちから「ハワイ生まれ」、「外人」としてからかわれて、立ち向かった経験を英語と日本語を混ぜて語った²²⁾。次はその日本語訳である。

クラスメートがいつも私の長い髪をからかってひっぱるわけね。あの時、沖縄はみんな坊主頭だろ。…からかわれて一度すごく怒ったことがあって、殴ったよ。英語で文句たくさん言ったよ。…そして石も投げたから…そしたら夜、その子達の親が私の家に来て、僕を叱るわけよ…でも次の日…見つけたらまた石投げたさ。…休憩時間は、（ハワイの）プランテーションでよく遊んだビー玉のゲームのやり方を教えて遊んでいたよ。僕は上手でゲームに全部勝って、ビー玉すべてもらったわけさ。そしたらまた親が家に来て僕が全部ビー玉を盗んだって叱るわけよ。ビー玉全部投げつけたよ。すごくガキ大将だった。

R氏は「ハワイ生まれ」であることを自覚しながらも、当時の沖縄で「遊び」を通した文化交流の担い手であったと意味づけ、自己の異質感を上手に乗り越えていくことの生活の術を語った。

沖縄で過ごした経験を話す際、沖縄系帰米二世は当時の沖縄の経済的状況が悲惨なものであったのかを強調する。当時の沖縄の生活習慣の一部であった豚小屋の隣に立地されているトイレがどうしても使えなくて、毎朝30分かけて駅の水洗トイレを使いに行ったというH氏。生後まもなく沖縄に帰った帰米二世は、当時の沖縄の経済的状況は、ハワイに戻ってきたときの食料

の豊富さに感激したという話との対照として語られ、話の隅々に、沖縄で体験した「オンボロの貧乏」としての苦労話が強調される。しかし、沖縄での経験は、現在のハワイでの生活がいかに豊かであるかということへの感謝の気持ちを高め、語りのなかでそれが強調される。また、「二世の中には好き嫌いの人多いね。でも私はなんでも食べるよ。沖縄には何もなかったからね（Yさん）」と、ハワイで育った二世と区別して自己を表現する。

また沖縄系帰米二世が過ごした当時の沖縄では、方言撲滅運動がなされ、学校において標準語を話すことが強いられていた。このような国家抑圧について沖縄系帰米二世は次のように振り返る。

あれは今から考えてみれば、内も外もみな方言。でも学校は普通語、標準語使わないといけなかった。でも何しろ、難儀なってね。結局方言のほうが話しやすいからさ。方言で話していたよ。…5, 6年生になると、そのころから方言を使っではいけないことになっていた。もしも言うこと聞かないで勝手に方言を使うと方言札を渡して罰をさせる。もし方言を毎日使うと掃除させられたりする。すると、おしゃべりがぜんぜんしたくなくなる。…（学校の）教科書はみな標準語、でも家での会話は方言でしよったよ（Nさん）。

語りからは、沖縄方言撲滅については国家の制度として仕方なく従ったものの、学校以外では方言を修得し柔軟な言語的生活スキルを身につけていったことがわかる。

2. ハワイに戻って

幼年期に沖縄に送られた帰米二世にとって、ハワイという新天地そして経済的に発展している土地での生活への期待は大きかった。生後6ヶ月で沖縄に送られ11歳まで育ったO氏は港に着くと一番に父を探したという。「父のことは写真でしか知らなくて…父と再会した喜びは言葉では表せない」、とその当時のことを思い出しているかのように語りに言葉が弾む。

確かに、インタビューした沖縄系帰米二世の多くは、帰米後、英語がうまく話せないこと、生活習慣や思想などの違いから、さまざまな葛藤や不利益を経験する。ハワイに帰った後、彼らは英語がうまく話せないことを理由に職業選択に不利益をこうむった。帰米当時は、「言語を必要としない皿洗いの仕事が唯一できる仕事であった」、とU氏は振り返る。女性帰米二世のNさんは帰米後まもなく白人家庭の「女中（メイド）」として働くことになり、その当時の思い出をこのように語った。

はあっさ、何が一番怖かったって、電話がなることだよ。電話がなったらすぐ洗濯場所に行って、水をジャージャー出して聞こえないふりをしていたさ。18にもならない人が電話も取りきれない。ハローも言い切れない。…あと洗濯機の使い方も料理も知らないから困ったよ。沖縄では芋と味噌汁しか食べないけど、ここはおかず、魚、いろいろあるさね。パンとかコーヒーとか見たこともないし。

しかしながら、彼女はその状況にいつまでも甘んじたわけではない。白人家庭で女中として

子どもの世話をしている傍ら、(白人) 英語を習得していった。今では「ハワイ育ちの二世である夫のピジン英語より私の英語の方が上手 (Nさん)」と誇らしげに語る。

帰米二世は、帰布後、ハワイで育った二世から、「ジャパン・ボーボラ」、簡単に訳すれば「日本から来たかぼちゃ」と冷やかされた。ボーボラとは、熊本などの方言でかぼちゃという意味で、語源はポルトガル語の「アボーボラ (abobora)」が語源といわれている。ハワイで育った二世の間では当時、社交ダンスなどアメリカ的なものが流行していたが、帰米二世にとっては、そのアメリカ的な趣味を楽しむことができず、帰米二世と二世の間には壁があり、両者が打ち解けることはなかったという。「趣味が違うから交際しようという意思がなかった。説明するのは難しいけど、交際しようという気持ちがなかった。どう言ったらいいかねー。それに当時はみんな貧乏に追われていた (T氏)」、と言うだけで、ハワイの沖縄コミュニティにおける内部の分裂については口を濁すことも多かった。「帰米二世」として沖縄で6歳から16歳まで育ったK氏は「自分のいともジャパン・ボーボラとってからかったよ (K氏)」と「帰米二世」ということで同じ沖縄の人から馬鹿にされたということを認めながらも、「沖縄としてからかわれるよりはまだいい。沖縄は地位が低かったよ (K氏)」と語った。語りのなかで、沖縄系帰米二世は帰米二世として差別の経験より、沖縄系移民として共有された差別の経験を強調する。

沖縄系帰米二世は、ハワイに戻ってきてまもなく、ハワイの沖縄の人が他府県人から差別されている状況に気づかされたという。沖縄系帰米二世は、ハワイに戻ってきた当時、なぜハワイの沖縄の人が沖縄の言葉を使えないのか驚いたという。「方言もしゃべらず、沖縄の文化を恥、ハワイの日系社会に同化していたのかと理解できなかった (G氏)」、「なーんだ？沖縄の人が沖縄の言葉を使えないのかって思っていた、こちらに来てね (Nさん)」と帰米した当時のことをこのように語っている。

Nさんはハワイに戻ってきてまもなく、沖縄系や他府県人が一緒に働いているツナの缶詰工場で働きはじめた。「工場で、よく他府県人が沖縄系の一世たちを馬鹿にしているのを目にしていた (Nさん)」、と次のように語ってくれた。

ここで (ハワイで) 正しい日本語使おうと気をつけた。沖縄の人は日本語を使おう使おうと気をつけていたんだはずね。広島・熊本・鹿児島の方の日本語がずっと荒っぽいよ。ハワイに来てから、彼らの日本語が荒っぽく聞こえたよ…ある事情で…缶詰工場に働くことになって、そこには広島の人、鹿児島の人がいるわけね。沖縄系一世の人のハジチ (入れ墨) を見て馬鹿にしようとしたよ。わざと悪い嫌がらせをした。「どうしてあの (沖縄の) おばさんたちは私達の日本語わからないのかしら？」ってよく文句を言いよった。…だから…「でもあなたたちが言う言葉は標準でないですよ」と言ってやった。…「おばさんたちは若いのに日本語わからないでしょう…たとえば、あなたたち、宮城って書いたら、ただ、ミヤシロとしか読めないでしょ？でも沖縄ではミヤギともミヤグスクとも読めます」…彼らはそれを聞いて、目をぱちくりしていたよ。…沖縄の人は余計に漢字を習っている。支那の人と会話もできるんだよ。…そういう風にしてたら、だんだん、沖縄の人は馬鹿にしないようになったよ。日本で教育を受けたおかげかね。よ

く「あなたはどこの人か？」と聞かれた。「私は沖縄県ですよ」といっていったら、「言葉使いが違う。言葉使いが上手だから沖縄ではないと思った」と言われる。「あなたなら親が内地か、片っぽが内地かでないのか？」とて言うから、「私は純粋な沖縄系です！」とてちゃんとやってやった。…私は沖縄の人が差別されたというのは聞くのも嫌だった。…実際そばで差別を見るとほっとけなかったよ。

当時、日本語を話す二世は少なく、沖縄で日本語教育を強いられた沖縄系帰米二世は、ハワイで育った二世と比べ読み書きもでき、日本語に堪能な方であったという。彼女の語りには、沖縄での日本語教育の経験を肯定的に自己評価する様子がみられる。沖縄の学校方言札を使用した徹底的な標準語教育を受けた体験が、皮肉にもハワイに来て、標準語を話す自分に価値を見出し、ハワイの沖縄系の地位の向上にチャレンジする意欲がもてたという語りである。これは沖縄の学校における徹底的な標準語教育を、国家によって抑圧された沖縄を、実際に体験した沖縄系帰米二世が、ハワイに来て、はじめて国家という枠組みから逃れたときに、社会的な不平等に対してチャレンジする知恵や意欲を持てたとも言えるのではないか。

沖縄系帰米二世の語りには、確かに先行研究が指摘するように、第二次世界大戦中、「生まれの国」アメリカと「育ちの国」日本との狭間にある葛藤が強調される。2歳の時から16歳まで沖縄で過ごし、1939年にハワイに戻ったS氏は、第二次世界大戦勃発後、すぐにFBIに呼ばれ、忠誠心を問われた。S氏はそのときの様子を次のように振り返る。

貯金がいくらあるか、いつ来たか、沖縄で何をしていたか、学校で何したか、教練を受けたかとか聞かれた。沖縄の中学に行った人が通訳していたからね、嘘をつける状態ではなかった。どうしても沖縄で育ったからね、日本人だということが現れてくる。嘘をついてもすぐ相手にはばれてしまった。むこうはプロだから、嘘を言ったときは、私は顔に表れていたみたい。兄は教練も受けていないし、はじめからアメリカ人だということを言うつもりだった。僕の場合はその心構えがなかった。嘘をついたときにはすぐ自分にもわかるさ。

S氏は、日本に忠誠を示し、収容所に6年も入れられた。S氏は6年の収容所生活は過酷であったと語るが、沖縄で叔父から虐待を受けた体験をもつS氏にとって、収容所生活は我慢できるものであり、「沖縄で苦勞しているからここに来て苦しかったことはない（S氏）」と悲惨な経験であったにもかかわらず、沖縄での体験に価値を見出す。また、「天皇陛下に従うという気持ちは、そのころは当たり前にもっていた。（米国）市民権も収容所で離脱したよ。どうせ市民とみなされていないのなら（市民権離脱しても）いいという気持ちだった（S氏）」とも語った。

また一方で、アメリカに忠誠を示し、その後、アメリカ軍として戦うことを決意した沖縄系帰米二世もいる。第二次大戦下の故郷沖縄でアメリカ人として沖縄人を含む日本人と戦わねばならなかったT氏は、その時の心理的葛藤を「わんねーあわれそーんよ。しっかりあわれんそーんよ。人の分より。しでいるちょーる（T氏）」（私は苦勞をしてきた。とても苦勞してきた。人

よりもしてきたさー), と自分がいかに人一倍苦勞したかを沖縄方言で語る。

彼らの第二次世界大戦の語りからは、日本とアメリカ両国に対する忠誠心の表示を強いられた際の感情的な悲痛が伺える。それは「生まれの国」と「育ちの国」との狭間にある葛藤である。日本と米国の間での心理的葛藤において、沖縄帰米二世がとった行動はさまざまであるが、戦争中という異常な状態においては、彼らにとって沖縄という選択肢はなく、アメリカと日本の両国のはざままで揺れ動いていたことがわかる。

日本で第二次世界大戦を経験している沖縄系帰米二世の存在も忘れてはならない。軍国教育を受け、自分はアメリカの国籍を保持してはいるが日本軍として戦いたいと、人間魚雷の訓練まで受けた沖縄系帰米二世（R氏）がいる。また、生後6ヶ月未満で沖縄に送られたO氏は10歳の時に沖縄戦を体験することになる。当時、壕の中で見た記憶を英語で語った²³⁾。次はその日本語訳である。

二世の米兵が壕に向かって「戦争は終わった」と叫んでいた…。日本語でも沖縄の方言でも。(壕にいた) 何人かは二世の言っていることを信用しないで闘おうとして外に出て殺されたよ。でも壕の中には(私の) 母みたいにハワイから来ていて、米兵が言っていることをちゃんと理解した人が何人かいた。だから、二世兵が壕に入ってきたとき、何人かが闘おうとしよったのを見て、そのハワイから来た人達が闘う必要はないってことを言って説得していたのを覚えている。…そういった意味では異なる国に住んだという人生経験が我々の命を救ったと思うよ。

沖縄戦は、沖縄で一緒に過ごした兄弟姉妹、親戚を持つハワイの沖縄系帰米二世を深い憂慮と思案の淵においやった。「幼児期を過ごした沖縄のことを考えるとご飯がのどを通らなかった」と沖縄で11年過ごしたU氏は語る。ハワイにも沖縄戦のニュースがたびたび流れ、ラジオ・テレビ等で「沖縄」という言葉を目にし、耳にする。沖縄戦後、戦争で被害にあった沖縄を救済しようと、今まで市町村別にバラバラだった沖縄コミュニティが一つに統合され、ハワイの沖縄コミュニティは団結する。救済活動を契機に、沖縄で幼児期を過ごしてきた沖縄系帰米二世に強く「沖縄」という意識が生まれてくる。沖縄の状況に詳しい帰米二世は、情報提供者として救済活動において重要な役割を担い、コミュニティにおける彼らの地位を高めた。また、沖縄を助けようというひとつの目的で団結するハワイの沖縄コミュニティの姿は、沖縄系帰米二世に、沖縄コミュニティの一員であるという帰属意識を高めた。

アメリカ軍は沖縄戦が終結するや、ただちに、沖縄の広大な土地に米軍基地をつくり、沖縄を27年間統治することになった。琉球列島米国民政府は、沖縄住民の軍との緊迫した状態を和らげるための「親米化」政策を実施する。岡野（2003）が記述しているように住民の間に広まっていた祖国復帰・反米運動を鎮めるために、民政府は、ハワイの沖縄系移民を「親米的琉球人」のモデルとして、沖縄が日本の下ではなく、アメリカの庇護の下でこそ経済的にも精神的にも利益をこうむることができるかを提示しようとした²⁴⁾。「琉球親善プログラム」は、その米軍の統治政策によって1959年から始動されたものであり、「沖縄住民の啓蒙、親米化、および沖縄の近代化を促進する」²⁵⁾ことを目的にハワイと沖縄間の人的交流を実施した。その統治政策

によるプログラムには、日米両語に堪能で、また沖縄のことにも詳しい沖縄系帰米二世も少なからず参加している。沖縄とアメリカという二つの社会にまたがっている沖縄系帰米二世が、アメリカと沖縄の両者間の橋渡しとなり、「沖縄—アメリカ間の緩衝装置としての役割」を担う立場にあった。このプログラムに参加した沖縄系帰米二世は、米軍のプロパガンダ的プログラムを批判するというより、沖縄とハワイの架け橋になれたから良かったというふうに自己経験を評価するだけで、当時の米軍統治政策については触れたがらない。

1980年代以降、ハワイにおいて沖縄の文化や言語に対する興味が深まり、沖縄系コミュニティが活性化した。そのなかで、沖縄系帰米二世は文化の情報源として、コミュニティにおいてさらに重要な存在になった。今日、三世、四世、五世においてはハワイの「ローカル」の文化を吸収し、沖縄の文化、特に沖縄方言についての知識は非常に限られている。毎年恒例のフェスティバルまたはハワイ沖縄連合会の文化活動がさかんになるなかで、沖縄系帰米二世の存在や経験は、ますますコミュニティにおいてポジティブに評価されるようになった。彼ら自身もまた「帰米二世」としての自己を肯定的に受け止めるようになっていったのである。

IV. ウルマ青年会

ここでは、1933年に沖縄系帰米二世、約30人によって設立された「ウルマ青年会」について少し触れよう。「ウルマ青年会」の会誌には、会員の苦悩、そして会の組織、活動、またその役割について記載されている。幼少期に沖縄に送られ、小学・中学を卒業しハワイに戻ってきたウルマ青年会のメンバーは、帰米後、英語がうまく話せないことや、ハワイで育った家族との葛藤、職業選択の不利益など、お互いの立場を理解し、相互扶助の必要性を痛感したのであろう。互いに精神的・経済的に支援する場を作ろうという目的で設立され、独自の活動を展開した。写真1にみるように当初は20代前後の沖縄系帰米二世青年のみの会であったが、1941年の真珠湾攻撃によって解散に追い込まれるまでの間、約8年間の活動を通して当初の会員のメンバーの家族なども加わり数を増していった（写真2・写真3）。



写真1 ウルマ青年会 メンバー（1935年）



写真2 ウルマ青年会 野球部 年不詳（1935～1941年）



写真3 ウルマ青年会 集合写真 年不詳（1935～1941年）

ウルマ青年会誌には、沖縄系帰米二世が帰米当時に抱いた感情や認識が以下のように明瞭に描かれている²⁶⁾。

職業問題だけが彼等の悩みではない。更にもう一つの悩みは周囲への同化し難いことである。若い二世とも古い一世とも話しが合わない。懐かしい親や親族は居るけれど長い間離れ離れに生活してゐたのであるから親子相剋の悲劇さへ演ぜられることがある。…今更日本へ帰って何になろう。日本は布哇以上に就職難ではないか。…斯る宙ブラリン的存在に彼等自身が生まれついたと言ふのでは決してない。其の罪を強ひて穿鑿

十ならば其の親にある。手足まといになる子供を日本へ歸して早く金を儲けて故郷へ綿を飾らうとした親の出稼根性の一義性に他ならぬ。

一方で、沖縄系帰米二世が帰米当時抱いたハワイの沖縄系移民の社会的地位の向上に対する意識が、会誌には明瞭に記録されている。戦前、ウルマ青年会のメンバーが帰布した当時、沖縄系移民の中では、沖縄系だけでかたまらず、日系もしくはアメリカの社会に打ち解けなければならないという主張があり、ウルマ青年会の結成を批判する声もあった。しかし、「一世と二世との仲介人」と捉えたウルマ青年会のメンバーは、ウルマ青年会を援助する一世達との関係を大切にす。一世の期待に応えて、ハワイにおいて沖縄の文化披露にチャレンジする。たとえば、ハワイでは当時珍しかった琉球相撲大会を催した（写真4 a・写真4 b）。この大会は市町村対抗試合であったことから、自分の出身地に対する愛着や団結、更にはハワイの沖縄コミュニティ形成の基盤となった。また日本語・英語雄弁大会を催し（写真5）、沖縄系移民の教育水準の高さを沖縄系移民及び他府県移民に認識させることとなった。「ウルマ青年会」の会誌には、「ウルマ青年会」が沖縄系帰米二世としての困難な状況をポジティブに変える姿勢を示すことによって、戦前、ハワイの沖縄系移民に沖縄出身であるということの肯定的な意識化に貢献しようとしたことが明瞭に記載されている。これまでのハワイの沖縄系移民研究では、戦前の沖縄系の固有のオキナワン・アイデンティティの目覚めについてはほとんど記述されてこなかったが、ウルマ青年会の活動はまさしくオキナワン・アイデンティティが顕著に現れているといえよう。

そして今、沖縄系帰米二世とのインタビューからは、「親の出稼根性の一義性」と記述されているような、彼等の帰米当時経験した悲痛は語られず、親の都合で沖縄に送られたとはいえ、そのことについては「離れていても親は親（E氏）」とむしろ感謝の気持ちが強く、彼らは自己をもはや犠牲者とは捉えないのである。ウルマ青年会の会誌に記述されている帰米当時の犠牲者としての自己呈示と、人生を重ねた今語られる自己体験の記憶の提示には違いが存在する。そこにはブルーナー（1984）の言う「経験された生（life as experienced）」と「語られる生（life as told）」²⁷⁾との違いで説明できるように、実際に経験したことでも、現在の自己の状況と照らし合わせ、現在の自己を定義するための必要な経験を選び、自己の人生の物語を新たに生成していく行為であるともいえよう。今日、彼らは沖縄コミュニティにおいて、沖縄文化の情報源として重要な役割を担い、自己の帰米体験が受け入れられたということを客観的に自覚することで、以前のウルマ青年会のように、同じ境遇同士が集まり自己表現の場をもつという必要性はない。彼らは自己を沖縄系帰米二世であるとはっきり区別せず、単に「オキナワン」と表示する。「帰米二世というより沖縄の血が騒ぐ（D氏）」といったようにハワイの沖縄の文化やアイデンティティが単に日本とはひとくくりにできないこと、あるいは同等に価値のあるものということがハワイ社会に受け入れられた今、沖縄系帰米二世は、自己をオキナワンという流動的なアイデンティティに身をおいている。



写真 4 a ウルマ青年会 琉球相撲大会（1938年）

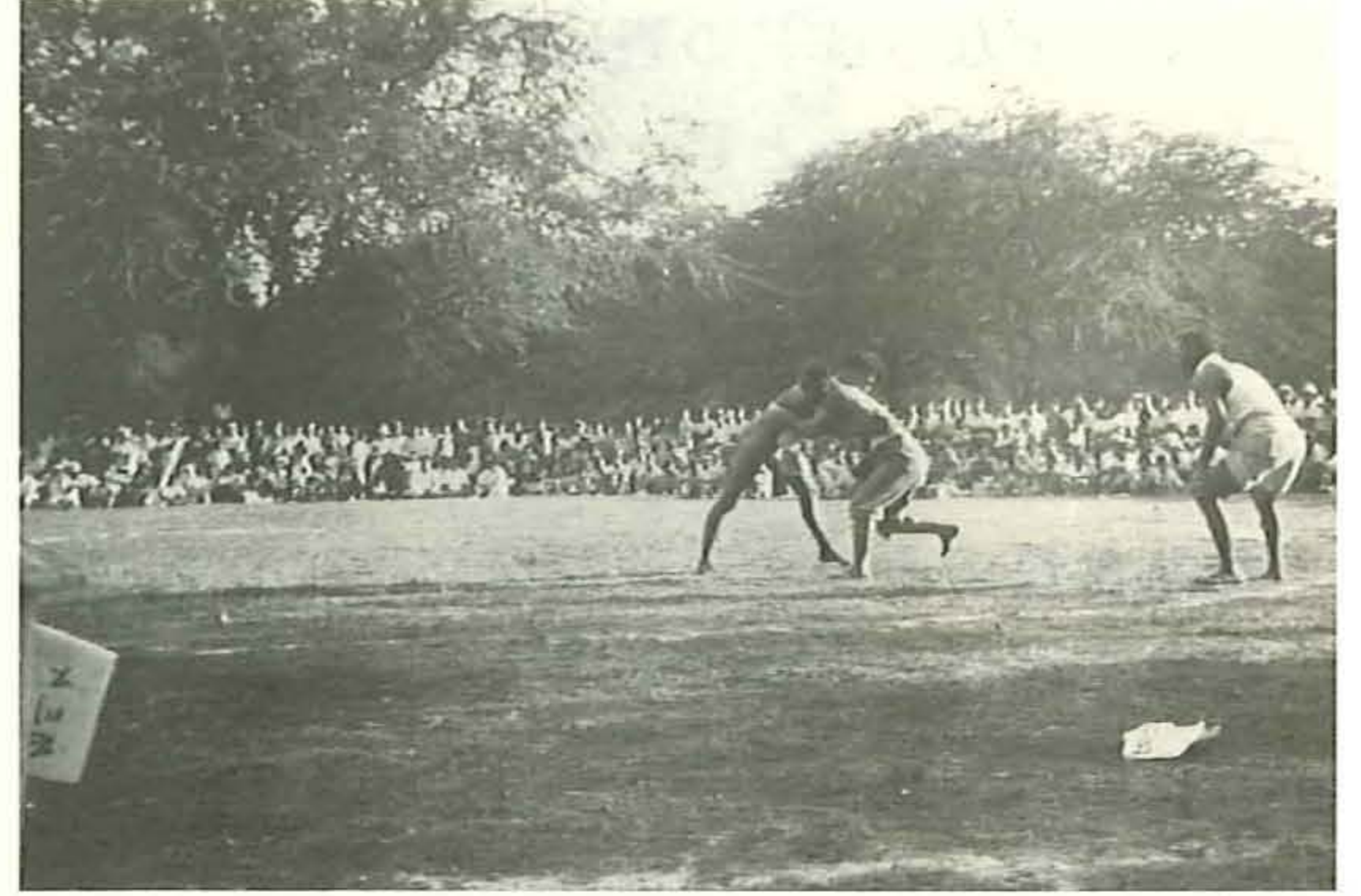


写真 4 b ウルマ青年会 琉球相撲大会（1938年）



写真 5 「ウルマ青年会」日本語・英語雄弁大会（1937年）

しかし、それは沖縄系帰米二世としての自己アイデンティティがなくなったということの意味するものではない。沖縄系帰米二世は、帰米二世としての悲痛な経験談を語るよりも、現在の自己によって統合された人生を他者に語るということで自己をソフトに表現している。たとえば、ハワイ沖縄センターにおいて、日本語に堪能な彼らは、日本からの訪問者の説明員として重要な役割を担っている。また「帰米二世」という言葉は日本からの訪問者にとってもあまり耳にしない言葉であるため、彼らは自己の経験を話すことによって、自分が何者であるのかを表現している。筆者がハワイの沖縄コミュニティの行事、集会などに参加し、沖縄コミュニティの参与観察を重ね始めた当初に、真っ先に声をかけてきた人が「帰米二世」であったことをよく覚えている。堪能な日本語で話しかけられ、おまけに沖縄のどこに住んでいるのか、^{あざ}字はどこかなど詳しく聞いてくる彼らの存在に戸惑っている筆者に、彼らは自己を「帰米二世」と名乗り、自分の生い立ちを自ら語り始めたのである。彼らは自己のライフストーリーのなかで他者に自己を定義し表現するのであった。

V. おわりに

沖縄系帰米二世の語りのなかには、「帰米二世」として、また「ウチナーンチュ」としての体験を選びながら、過去の経験を現在の自己と照らし合わせ意味づけてライフストーリーを生成する行為がみられた。沖縄での貧困生活、強いられた標準語教育、また帰米当時抱いた「帰米二世」そして「沖縄系移民」としての社会からの二重の疎外感についての話の隅々には、自己の過去の経験に価値を見出す意味づけが見られた。また彼らは自己をハワイの沖縄コミュニティとの関連で定義した。帰米当時、他府県人から差別されていたハワイの沖縄系移民の地位向上に対する責任感をもち、沖縄人というポジティブな意識化に貢献しようとしたことを語った。また、語りの中からは、ハワイの沖縄コミュニティが経験した歴史的発展の中で、沖縄系帰米二世が自己の地位を変化・向上させてきたことがわかった。特に1980年代以降の沖縄コミュニティの活性化によって、沖縄帰米二世の存在と彼らの体験談はコミュニティにおいて肯定的に受容されている。沖縄コミュニティの中で重要な役割を担いながら自己を肯定的に認識するように自己成長を遂げた。帰米当時抱いていた帰米二世としての疎外感を克服し、現在、沖縄系帰米二世は自己体験を他者に語るということで自己をソフトに表現している。その過程には、沖縄系帰米二世としての自己、そしてそれを取りまく他者との相互関係があり、その中で自己体験に価値をおき、自分のポジティブ・マージナリティの側面を主体的にも客観的にも自己受容したといえるだろう。沖縄系帰米二世のライフストーリーには、彼らが近代国民国家によって追いやられた結果経験した「周辺部」をポジティブに生き抜いてきたことによって、その周辺部で、あらたな生活の拠点と接点をつくりあげるといふ、社会における人間の主体性が反映されている。本研究は、経済的な理由で沖縄へ送られたハワイの沖縄系帰米二世に限定したが、今後は対象をひろげるとともに、個々人のライフストーリーをさらに詳細に考察できるような情報収集が必要であろう。

謝辞

ハワイの沖縄コミュニティにおいて長年ボランティアに携わり、ハワイの沖縄系移民のことについて非常に詳しい沖縄系帰米二世の新川洋子氏には、調査についての助言や貴重な資料等を頂戴した。ここに深く感謝申し上げます。また、インタビューに応じてくださった帰米二世の方々にもお礼を申し上げます。さらに、貴重な写真を提供して下さった阿嘉良雄氏には厚くお礼を申し上げます。最後に、小渕東西センター奨学金により、修士論文を仕上げることができましたことに感謝申し上げます。

注

- 1) 玉代勢法雲 「ウルマの意義」、『ウルマ青年会 会誌 ウルマ第一号』（ウルマ青年会、1935年）1～3頁。
- 2) 岡野宣勝 「ハワイの沖縄系移民をめぐる言説」、『アジア遊学 Intriguing ASIA』（勉誠出版、2003年）、142頁。
- 3) 沖縄系社会の代表的な組織機関である「ハワイ沖縄連合会（Hawaii United Okinawa Ass

ociation)」は、沖縄の固有の伝統文化を次世代に継承することを主な目標に捧げ、「ハワイ沖縄センター (Hawaii Okinawa Center)」を拠点に独自の活動を展開している。ハワイ沖縄連合会主催で毎年行われる「オキナワン・フェスティバル」は10万近い観客を集め、ハワイ最大のエスニック・フェスティバルと成長している。白水 (1998) はオキナワン・フェスティバルを「無形文化財的な文化運動装置」と見なし、ハワイのオキナワン・コミュニティの活性化の機能を果たすだけでなく、オキナワン・コミュニティのなかだけの「内輪の文化」から「ハワイで共有される文化」として沖縄文化を披瀝する場と変容しつつあることも指摘している。2005年のフェスティバル記念ティーシャツには沖縄県旗のデザインが刷られ、さらに固有のエスニシティを顕在化した。

- 4) 山下草園 『日系市民の日本留学事情』(文成社, 1935年), 1～24頁。
- 5) 同, 9頁。
- 6) 同, 18～22頁。
- 7) 同, 167頁。
- 8) 同, 167頁。
- 9) Masuda, William T. 1993. A participatory study of the self-identity of Kibei Nisei men: A subgroup of second generation Japanese American men. Dissertation (education), University of California, San Francisco. p.40.
- 10) 桑井輝子「1930年代の帰米運動ーアメリカ国籍法との関連においてー」移民年報No.30 (1993) 151頁。
- 11) 山城正雄『帰米二世：解体していく「日本人」』(五月書房, 1995年), 138頁。
- 12) Strong, Edward J. 1934. *The Second Generation Japanese Problem*. Stanford: Stanford University Press.
- 13) *Hawaii Pacific Press*, January 1, 1992 .
- 14) Smith (1948: 254), Tamura (1994: 175), Maykovich (1972: 84) 等が先行研究である。
- 15) 金城宏幸「終わりなき同化と異化のはざまにーウチナアンチュ・コミュニティと帰米二世の言語文化」平成13・14・15年度科学研究費補助金(基盤研究A)研究成果報告書 別刷 日米における同化政策と20世紀沖縄 琉球大学法文学部 2004年。
- 16) やまだようこ『人生を物語るー生成のライフストーリー』(ミネルバァ書房, 2000年), 2頁。
- 17) 石原昌家「沖縄出稼者と定住ー異文化接触と同化過程ー」谷富夫編『ライフストーリーを学ぶ人のために』(世界思想社, 1996年), 56頁。
- 18) ブルーナー (Bruner, J.S. 1990) は、人は、日々の行動を構成し、秩序づけ、「経験」として組織し、それを意味づけながら生きていると述べている。ライフストーリー研究とは、自分自身の経験をどのように組織するのか(経験の組織化, organization of experiences), どのように意味づけるのか(意味の行為, acts of meaning) という問題を明らかにするところにあるという。
- 19) 浅野智彦『自己への物語論的接近』(頸草書房, 2001年), 5頁。
- 20) ポジティブ・マージナリティという概念は最初にClara Mayoによって1982年に作られた

用語で、それをUnger Rhada. K. が2000年に発展させたものである。Ungerによると、ポジティブ・マージナリティとは、社会における不平等を捉え、それを変えていこうとする知恵と意欲を与えるマージナリティのことである。またUngerは、以前に拒否されてきたグループのライフストーリーの側面を自主的にまた客観的に価値があるものとして認識することによって、ポジティブ・マージナリティが実現できるということを指摘している。

- 21) Bruner, J.S. 1990 Acts of meaning. Harvard University Press. 岡本真木・仲渡一美・吉村啓子（訳）『意味の復権－フォークサイコロジーに向けて』（ミネルバァ書房，1999年）。
- 22) “クラスメートがいつも私の長い髪をからかってひっぱるわけね。You know, in those days, Japan kids had bouzu *atama*.…からかわれて一度すごく怒ったことがあって、殴ったよ。英語で文句たくさん言ったよ。You know, stuff like, “son of a bitch!” yeah? そして石も投げたから…Next morning, their parents came to my house and scolded me.…でも次の日…見つけたらまた石投げたさ。…you know, during the school break… I taught them to play the game that I used to play on the plantation. I was good and I won the matches and I gained all the marbles from my friends. Then, again my friends’ parents came to my house and scolded me and accused me of stealing the marbles.…I flung all the marbles at them. I was very *gaki-daisho*.”の訳（筆者）。
- 23) “You know, when we were in the cave, Americans Nisei shouted into the cave, the war is over, war is over. They said it in Japanese and Okinawan dialect, too. But some of them did not believe so they did fight and got killed. But we had a few people like my mother those who came from Hawaii knew exactly what Americans were thinking about. When Nisei came to the caves, some people wanted to fight against Americans but those people discouraged them not to fight by telling them there was no meaning to fight. My mother was telling me that Americans were not like that. That part, life experience that they had in foreign country really saved their lives.”の訳（筆者）。
- 24) 岡野宣勝「ハワイの沖縄系移民をめぐる言説」、『アジア遊学 Intriguing ASIA』（勉誠出版社，2003年），145～146頁。
- 25) 同，145～146頁。
- 26) 豊平良金「帰布青年よ何処へ行く」『ウルマ青年会 会誌 ウルマ第一号』（ウルマ青年会，1935年），15頁。
- 27) Bruner, E. M. 1984. Text, play, and story: the construction and reconstruction and society. Waveland Press.

文 献

- 浅野智彦『自己への物語論的接近』（頸草書房，2001年）。
- 石原昌家「沖縄出稼者と定住－異文化接触と同化過程－」谷富夫編『ライフストーリーを学ぶ人のために』（世界思想社，1996年）。
- 岡野宣勝「ハワイの沖縄系移民をめぐる言説」、『アジア遊学 Intriguing ASIA』（勉誠出版，2003年）。

- 金城宏幸「終わりになき同化と異化のはざまにーウチナーンチュ・コミュニティと帰米二世の言語文化」平成13・14・15年度科学研究費補助金（基盤研究A）研究成果報告書 別刷 日米における同化政策と20世紀沖縄 琉球大学法文学部 2004年。
- 桑井輝子「1930年代の帰米運動ーアメリカ国籍法との関連においてー」移民年報No.30（1993）pp. 149-162。
- 白水繁彦『エスニック文化の社会学』（日本評論社，1998年）。
- 玉代勢法雲「ウルマの意義」、『ウルマ青年会 会誌 ウルマ第一号』（ウルマ青年会1935年）。
- 豊平良金「帰布青年よ何処へ行く」『ウルマ青年会 会誌 ウルマ第一号』（ウルマ青年会，1935年）。
- 山下草園『日系市民の日本留学事情』（文成社，1935年）。
- 山城正雄『帰米二世：解体していく「日本人」』（五月書房，1995年）。
- Bruner, E. M. 1984. *Text, Play, and Story: The Construction and Reconstruction and Society*. Illinois: Waveland Press.
- Bruner, J.S. 1990. *Acts of Meaning*. Massachusetts: Harvard University Press.
Hawaii Pacific Press
- Mayo, Clara. 1982. "Training for positive marginality," in L. Btchkman ed., *Applied Social Psychology annual*. 3:57-73.
- Masuda, William T. 1993. A participatory study of the self-identity of Kibei Nisei men: A subgroup of second generation Japanese American men. Dissertation (education), University of California, San Francisco.
- Maykovich, Minako K. 1972. *Japanese American Identity Dilemma*. Tokyo: Waseda University Press.
- Unger, Rhada K. 2000. "Outsider Inside: Positive Marginality and Social Change," in *Journal of Social Issues*. 56: 163-180.
- Smith, Bradford. 1948. *Americans from Japan*. Philadelphia: J.B. Lippincott.
- Strong, Edward J. 1934. *The Second Generation Japanese Problem*. Stanford: Stanford University Press.
- Tamura, Eileen H. 1994. *Americanization, Acculturation, and Ethnic Identity: The Nisei Generation in Hawaii*. Urbana: University of Illinois Press.
- Unger, Rhada K. 2000. "Outsider Inside: Positive Marginality and Social Change," in *Journal of Social Issues*. 56: 163-180.

（まえはら きぬこ・ハワイ大学マノア校大学院博士課程院生・社会学）

TO OKINAWA AND BACK AGAIN : Life Stories of Okinawan Kibei Nisei in Hawai'i

Kinuko MAEHARA

University of Hawai'i at Manoa, Ph.D. Program in Sociology
(Sociology)

This paper focuses on the life stories of Okinawan Kibei Nisei in Hawai'i and examines the ways in which they reconstruct the meaning of their life experiences as a process of self-defining. Most references to the Kibei Nisei have focused on their marginalized status in larger society by emphasizing the difficulties that they had in adjusting to American society because of their experiences of being raised and educated in Japan during their childhoods. Particularly, their World War II era experiences of polarizing pressures of identity choice between Japan and the United States have received substantial attention in previous studies. In this paper, the author emphasizes how aspects of their positive marginality developed over the course of their lives. This study relies on life stories of fourteen Okinawan Kibei Nisei elders in Hawai'i who were sent to Okinawa at an early age and returned to Hawai'i in their mid to late teens. The author collected their life stories through conducting intensive interviews and participating in Okinawan community events and gatherings in Hawai'i over the time period of a year and half from February 2004 to May 2005.

Their life stories reveal the following points. First, Okinawan Kibei Nisei generated their stories by selecting unique experiences that they had in their lives because of their self-identification as "Kibei Nisei" and "Uchinanchu" and reconstructed the meaning of these experiences from their present point of view. They gave meaning to their sorrows of their past experiencing Okinawa's poverty, the forced imposition of a standardized Japanese education in Okinawa, and the sense of dual dissonance as both Kibei Nisei and Okinawan immigrants upon returning to Hawai'i. Second, their life stories reveal that over time they came to define themselves in relation to the larger Okinawan community in Hawai'i. As described in their life stories, from the time of their return, the Kibei Nisei bore a sense of responsibility to foster an appreciation of Okinawan culture and pride as Okinawans in Hawai'i, and to challenge discrimination by mainland Japanese immigrants. In addition, the life stories also reveal that their social status within the Okinawan community in Hawai'i rose as an interactive process in the socio-historical development of the Okinawan community in Hawai'i. In this paper, the author treats Okinawan Kibei Nisei as active agents by demonstrating how they reframed their status from being politically, economically and historically marginalized according to the social structure of the society in which they were situated, and were able to establish a positive foundation for their lives, from their unique position to bridge the cultural, social, linguistic and

geographical divide.

Key Words: Okinawan Kibei Nisei, Life Stories, Identity, Ethnicity